剣と魔法のファンタジーも十数種類の素粒子と四つの力と十一次元で構成されてる

五十嵐　ゆう

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
剣と魔法のファンタジーも十数種類の素粒子と四つの力と十一次元で構成されてる

【Ｎコード】
Ｎ１８８３Ｚ

【作者名】
五十嵐　ゆう

【あらすじ】
少年はある日、白い空間に居た。そこで出会った我侭な神様。
神様のひまつぶしに剣と魔法のファンタジーの世界にＧＯする事に
武器は神様のくれた一方さんの能力のみ

序章（前書き）

禁書を知らない人は、ベクトルについての説明を見てください

ベクトル：向きを持つ力の大きさ、

逆に向きのない、大きさだけの物はスカラーと呼ぶ

向きがある力は何でもベクトルです、運動量、熱の運動、電気の流れ、速度、加速度

以上、ベクトル講座

序章

少年は気が付いたら見知らぬ白い場所に居た
「……あ？」
驚愕の余り、威嚇の様な声が出た。決して何かを威嚇してる訳ではない
「何ここ？どここここ？どういう事？」
その言葉を言ったあと、はい、と少年は続けて
「『こ』って何回言った？」と言った
虚しくなり、出口か何かを探そうとした直後
「六回じゃな？」
後ろからそんな声が聞こえてきた
自分以外に人は見当たらなかった筈だが、と振り向くと
白い入院着の様な物を着た老人が居た
ちょっと警戒しつつも、この人に聞く以外選択肢はないので
「ここは何処ですか？」
と尋ねる
「ふむ、さっきの回答が正答か否か聞いてないが……まぁ、どうでもいい
ここは……まぁ、次元の狭間とでも言うておこう」

その言い方が引っかかり、少年はまた質問する

「次元の狭間とでも～、という事はは本当はなんですか？」

「べつに間違ってる訳ではない、ただ正確に説明する事は無理なんじゃ

日本語の語彙に無いからの」

日本語の語彙に無い、どういう事かピンと来ないだろうが
例えば、日本語の「勿体ない」という言葉は外国語には存在しない
外国には「勿体ない」という概念がないからである

「そうですか……それで、私は何故此処に居るんですか？」
少年はまた質問する

「わしが呼んだからじゃな」
老人は即答する

「何故呼んだのですか？」
また質問をする

老人は、少し考えて、言った
「……なんとなく？」

「……」
少年は少し沈黙したあと、老人に急接近して
腹パンチする

「おらぁっ！」

しかし、普通に防御される

「いきなり何をする？一応、己の生に飽きと諦観を覚えた者を選んだつもりだが……」
老人は歌うように主張する

少年は老人を睨みつけながら怒鳴る
「勝手に人の人生を勘定してんじゃねえぞコラ！その通りでは有るけどな！！」

「と、言うわけで、お主には異世界に行ってもらう」
老人は、サラっと言う

「なんでだよ！！！」
少年は絶叫する

「暇だからじゃ」
老人は例によって即答する
少年が何かを言う前に老人が、じゃが、と続ける

「願い事を3つ、殆どなんでも叶えてやる。
例外はあるが、ほぼ全ての願いを叶えてやれる」

少年は、少し考える
そして
「じゃあ死ね」

「無理じゃ、わしに死の概念はない。頑張ればいけるが、恐らく即座に復活するぞ？」

少年は本気で舌打ちして
「じゃあチート能力でも願おうかな、一方通行（アクセラレータ）くらいしか思い浮かばない
……それでいいや」

「粒子加速器？いや、禁書の方か？」

「禁書の方です」
少年は即答する

「ベクトル変換と天使化、ＡＩＭ拡散力場とかないが、黒翼もか？」
老人はやけに詳しく聞いてくる

お前も禁書厨か？とか思いつつ、少年は答える
「黒翼は……一応付けてください、あと演算能力も」

老人はどこから取り出したか、魔法少女モノのステッキ（明らかにプラスチック）を
振りながら
「チンカラホイ！今の動作に意味はない。で、二つ目の願いは？」

少年は口を抑えながら言う
「おえっ、吐き気がする。ビニール袋くれ」

「それが二つ目か？ほれ」
老人が手を開くと、ビニール袋が出てくる

「……」

「三つ目は？」

少年はうーん、と考えて
「願い事を無限に増やせ」
「じゃあ今ここで無限に願いを言い続けろ」
「……」
老人はドヤ顔を浮かべる
「……」
「無限の中の一つ目だ、これで願いは終わりにして」
老人は明らかに落胆し、そしてニヤリと笑って言った
「人間って面白」
とりあえず無視して言う
「質問いいか？」
老人は答える
「どうぞ？」
「帰って来れるか？」
「帰ってこようと思えば帰って来れる、だが帰ってこようと思わない奴を選んだつもりじゃ」
少年は、少し落ち込んだ
「それは事実だが……。まぁいい、次の質問、お前は何だ？」

「わし？お前はどう予想する？」

「……神？」

「じゃあわしは神じゃ、お前がそう思うのならそれが正解じゃ」

少年は、少し黙り込んだ、そして

「……本当は？」

「別に神という解釈も間違いじゃあない、お前が神と思うなら神だし、仏だと思うなら仏じゃ」

「じゃあお前は屑野郎だ」

「そうか」

老人は少し笑った

「取り敢えず、お前には十二歳の女の子になって、剣と魔法のファンタジーの世界へ行ってもらう」

「なんで！！？」

「なんとなくじゃ！！」

少年は思いっきり地面を踏みつける、そのベクトルを変換し老人にぶつける

しかし、老人は全く動じない

「言語中枢を書き換えて、向こうの言葉を分かるようにした。

という訳で『｜ＦｐＶｇｍＭｓｐＨｒ　ａＺＥｙＺＶｒＸｙｇ《眠

れ、少年》『」

老人は、恐らく天上の言語とかそんな感じの言葉で短い言葉を紡ぐ

勿論、少年には意味は理解出来ない

少年は意識が薄れていく――

序章（後書き）

続く

衝撃力（前書き）

$$F = ma$$

衝撃力

「おい！大丈夫か！？」

少年に向かって、聞いたことがない言語で声がする
しかし、意味は認識出来た

「……はっ！」

少年は、思いっきり起き上がった

「……ここは？」

その時、少年は異常に気付いた。声が物凄い高いのだ、心当たりはある
『今からお前には十二歳の女の子になって剣と魔法のファンタジーの世界に行ってもらう！』

（……あの糞ジジイ……！）

少年は、いつか殺す、と考えた所で思考を一旦止める。
そして自分に話しかけてきた人と、その周囲に意識を向ける

話しかけて来た人は、長身の男性、髪色は青……
生物学的に有り得るのか？染めてるのか？
年は二十三から二十五、三十代ではないだろう
顔はイケメンだった、滅べ

周りの風景は、殆ど石造建築の建物、下は地面と草

一六世紀の西洋みたいな感じだった、世紀は適当に言った

少し違和感を感じて自分の格好を見てみた

全裸でした

「……は？」

ここまで〇．五秒

一方通行並みの演算能力を望んでおいたからであろう

めっさ頭の回転が早いぜ、ひゃっはー

「おい、大丈夫なのかおま――

「きゃぁっ！」

少年は、そんな感じの素頓狂な叫び声を上げてしまった

死にたい、少年はそう思った

――――――――――

――――――――

――――

石で出来た家

「いや、本当すいません」

少年は、何故か知ってる言語で謝罪した

恐らく、あの自称神様の老人の粋なはからいだろう

謝罪の理由は、叫んだ後、この青年が警察に連行されそうになって慌てて弁明した訳です、後は分かるだろう

「別にもう怒ってないからいいんだけどさ……」

青年はカップを片手にそう言う

青年は、それじゃあ、と続けて

「君、名前は？　それとどういう事情であんな事になってたのか」

少年は、少し考える

（別に本名を名乗る義理も意味も無いしな……）

「名前は、火野神作です。事情は……」

少し黙り込む。その理由は簡単だ、ただ状況を整理しているだけである

「ヒノジンサクね。どうした？言いにくい事情でもあるのか？」

青年はそう尋ねる

「……意識が無かったから、覚えてないのですけど……

多分、寝てる間に全裸で放り出されたのだと……」

恐らく自称神様、略して　じしょかみっ！がやったのであろう

あいつならやりそうだ、と少年は考える

「……酷いな」

青年は思わず言葉を零す
少年も、それには大いに同意だ、と思う、口には出さないが

少年は話題を終わらせようと
「ところで、貴方の名前は何？」

青年は答える
「ん？名前ね、ミハイル」

「ふぅん、じゃあミーシャって呼ぶね、いいよね？答えは聞いてない」
少年は無邪気な笑みを浮かべながら言った

ミーシャは少し詰まりながら言った
「あ、ああ、いいけど……」

ところで、とミーシャが言う
「君、今晩どこで寝る？」

「さぁ？最悪路上でなんとかなる、といいな」
反射をすれば、大抵の危険から身を守れる、と少年は思う

ミーシャは相当驚愕してから、数秒で落ち着かせて
「いやいや、危ないよ」

「しかし、金もないからなー……」

「じゃあ、うちに泊まってく？」

少年は、ふむ、と考えて
「いいの？」

「いいよ、部屋は無駄に有るし」

ふふ、と少年は笑って
「じゃあお言葉に甘えて」

ミーシャはプイ、と顔を背けて
「……それじゃあ、そこの部屋使って」

少年は、頭に疑問符を浮かべながら言う
「……？なんか怒らせた？」

ミーシャは慌てて否定する
「ああ、すまん、怒ってるわけじゃあない」

「……？まぁいいや」
少年は、ふざけた口調で続けて

「ちなみに言っておくけど、寝込みを襲うのはＮＧなんだからって
――

「誰がするか、そんな事！！」

衝撃力（後書き）

続く

運動量（前書き）

$$ma = m\frac{d^2r}{dt^2} = F$$

運動量

「おーい起きろー」
ミーシャは、少年を起こそうとしている
少年の体を揺さぶろうと、触れた瞬間

バチィと手が弾かれた

これは、恐らく無意識の反射による物だが、ミーシャはそんな事知ったことではない

「魔法……？……お前起きてるだろ？」

沈黙が十秒程経った後、そろそろミーシャも痺れを切らした様で
思いっきり少年を蹴った
見た目十二の少女を蹴るのはどうかと思う

すると足が折れた
「ぎゃあああああああああああ！！」

「むぅ……うるさい……」

――――――――――
――――――
――――

「あれは無意識にやってるからね、というか本気で蹴ってくるとか思いもしないし」

「無意識だったのか……」

「私の能力は、皮膚に触れた凡(あら)ゆる力を正反対に変える能力」

本質とはかけ離れているけど、それを態々（わざわざ）説明する義理はない

「結構すごいな」

「リチウミル先生〜」

突然十一歳くらいの男の子が入ってきた

「誰この人？」

幼児は少年を指さしながら言った

そして、少年は冷めた目で見つつ

「人を指さすな」

とだけ言った

ちなみに、少年は『指さすな』とかそんな怖い表現では無く『人を指さしちゃ駄目だよ』みたいな表現をしたかったのだが、

ここの言語を文字通り頭に叩き込まれて早1日、生憎そんな語彙を持ち合わせてる筈もなく

「ご、ごめんなさい！！」

幼児は本気で恐怖してる様だった

そしてミーシャが

「そんなに指さされるの嫌だったのか？」

（……そんなに怖かったか俺？）

少年はちょっとへこんだ

「この子はヘリナ、俺の教え子」

「先生をやってるの？」

「塾の先生を暇つぶしに」

暇つぶし、て……、少年はそう思ったが言わない

塾の先生に免許はいらなかった筈だから

「こいつはヒノジンサク、全裸で放り出されてた可哀想な子だ」

「火野って呼んでね」

少年は間髪入れずに言った、別にどうでも良かったが、取り敢えず言っておいた

「よろ――

ヘリナがなんか言った気がするが、それを置き去りに少年は言う

「タイミング逃したんだけど、リチウミルって貴方の苗字？」

「ああ」

「……」

ヘリナが　はなしにいれてほしそうに　こっちをみてる

「……ヘリナ君……だっけ？よろしく」
少年は誤魔化す意味合いを込めてニコッと笑った

ヘリナは笑顔で言った
「よろしく、ヒノ」

少年は欠伸をしながら言う
「それじゃあ自己紹介も済んだ所で、私は寝る」

ミーシャは呆れながら言った
「お前起きたばっかだよな？」

「チッ……うっせーな、反省してまーす」

「……腹立つなお前」

「すまんね、……よし！ここから出ていった後、どうしようか……」

ヘリナは無視して言う
「……先生」

ミーシャも少年を無視して答える
「おぅ、なんだ？」

少年は無視された事を不服に思いながら、言った
「……スラム街に行って襲ってきた奴から逆に金品を強奪すればいいかな……」

ミーシャは諦観を覚えつつ言う

「……はぁ……いいよ、ウチに泊まってけば」

少年は社交辞令の笑みを浮かべながら

「ありがとう、でも明日出てくね。金を手に入れる方法なら見つけたから」

「それをやって欲しくないから言ってんだよ！！」

少年は無視をやり返しながらヘリナに尋ねる

「先生に何か聞くこと？言うことがあったんだよね？」

運動量（後書き）

面倒臭いので次回に続く

四つの力

ヘリナは、戸惑いを覚えつつ、聞いてみる
「どうして物は下に落ちるんですか？」

簡単だ、引力で地球と物が引き合ってるからだ
子供でも知ってる理論である

ただ、ここは剣と魔法の世界、科学の発達は遅れている
天動説が流行って、形而上学が出てきた時位の科学力である

ミーシャは、沈黙する
それはそうだ、例えば『何故１＋１＝２になるんですか？』と聞かれてる様な物だ
それが世界の法則だから、としか答えようがない
普段当たり前に感じているので気にも止めないのだ

「引力でこの星と物が引き合ってるから」
少年は適当に考えもせず、質問に答えた

ヘリナが質問をする
「じゃあ、なんで星と引き合うんですか？」

「万有引力、全ての物に引力がある。質量によって引き合う大きさは変わる、
天体は質量が桁違いだから、大抵が星に引き寄せられる」

「空の星にも引力はあるんですか？」

「ある、ただ凄い離れてるから、地上から引力を感じる事は出来ない」

少年は質問に答える

知識を垂れ流したくなるのが人間って生き物なんですよ

ヘリナが数回質問した後、ミーシャが言った

「……別に俺がどうこう言える物じゃないんだけどさ――

「――まぁ私の言った理論が正しい証拠はこの世界にはないけどさ、筋は通ってるだろう？」

少年が言葉を遮って言った

ミーシャは少し考えてから、言う

「……怒った？」

「別に？　信じられない気持ちは理解出来ないでもない、歴史上進んだ理論は必ず糾弾されるしな」

中性子理論や、有名な物では地動説など、歴史上では進みすぎた理論は必ず批判される

ただ、それが正しかったと証明されたら直ぐ様計算式に組み込むけどな

ミーシャは、ふぅん、と言って、詳しくは聞かなかった

ヘリナは、あっ、と言って
「もう帰らなきゃ！じゃあね、先生、ヒノ」
「おぅ、気を付けてな」
「さいなら～」

――――――――
――――――――
――――――――

「あの子は将来天才になるよ」
少年は、呟く
そして少女が突然虚空から現れる
「そうだね～」
少年は、叫ぶ
「てめぇ何故此処に！？」
「何故って、神様に呼び出されたからだよ？」
ミーシャは驚愕で声が出ない様だ
少女は少年に言う
「久しぶりっ☆レイキきゅんっ☆（ゝω・）v」
ミーシャは、ん？、と言って
「そいつの名前はヒノじゃないのか？」

少女は、テンションを素に戻して言った
「あ、それ偽名ね、本名は西田麗機」
ミーシャは、レイキの方を見て言う
「……おい」
レイキは目を逸らす
「……」
少女は話題を終わらせようと
「自己紹介するね、私は『塩崎純菜』、レイキきゅんとは幼馴染だよ」
「残念ながらな」
レイキは、本気でため息を付きながら言った
純菜は少し沈黙してから言った
「……傷つくよ？」
「傷つけ」
レイキは即答する
純菜はため息を付き
「はぁ……本当に傷ついた。君ちょっと毒舌さ増してない？」
レイキは疑問符を浮かべ
「？　別にいつもこんな感じじゃない？」

ミーシャは、思わず
「いつもこんな感じかよ……」
と漏らした

「『まぁ僕が精神的に疲れてるせいかな？』」
純菜が言葉を発する、しかし、雰囲気が変わる。『気持ち悪い』そう形容するしかないような

レイキとミーシャは一歩飛び退く

すると雰囲気は消える

純菜は、聞いてよ、と言葉を紡ぐ
「聞いてよ奥さん、神様に大嘘憑き（オールフィクション）頼んだんだけどさ、これ気ぃ抜いたら発動すんだよ、何回か世界消しかけたしさぁ……」

純菜は言葉を続ける
「本当、説明だけ見たら便利そうなのに、実際持ってみると不便すぎんだよねぇ……」

レイキは、何か微妙な顔をしながら
「お、おぅ、大変そうだな」

「まぁ、大嘘憑きキャンセルの能力貰ったからいいよ」

四つの力（後書き）

続く

大嘘憑き（前書き）

――その幻想をぶち殺す！！
ベクトル操作を手にした少年『西田麗機』

――私の絶命を無かった事にした
大嘘憑きを手にした少女『塩崎純菜』

大嘘憑き

「起きて～」
純菜は、レイキを起こそうとする
しかし、反射で触れる事が出来ない

「……反射！？　……なら……」
純菜は掌に手榴弾を召喚した
そしてピンを抜き、放る

ドッカーン、という爆音が鳴り響く
しかし反射されているのでレイキは傷一つ負わない

「！！？　なんだ！？」
レイキは飛び起き、周りを見渡す
音は反射されていないので、鼓膜が思いっきり破れた

「『鼓膜の傷を無かった事にした』。おはよっ、レイキきゅんっ☆」
純菜は何事も無かったかの様に、話しかける

「……どこから手榴弾持ってきた？」
壁に突き刺さった破片と、今の台詞で全てを理解した。
一方さんの計算能力パネェっす

「勿論、私の能力だよ☆神様は、願い事をみっつ叶えてくれるんだよ？」
純菜は、当たり前の事の様に言った
純菜は続けて
「一つは大嘘憑き（オールフィクション）

一つは武器を無から出現させる能力
もう一つは……秘密っ☆」

「……成程な……」

レイキは、ふぅー、と息を吐いて

「――この物語(せかい)が、
神様(あんた)の作った奇跡(システム)の通りに動いてるってんなら……」
レイキはベットから飛び降りる――

「まずは――」

「え？え？何？」
純菜は、混乱してるが、レイキは無視して続ける

「その幻想をぶち殺す！！」

レイキは純菜の頭に触れる、その右手で

そして血液逆流を実行

純菜は生命活動を停止、死んだのだ

「Ｉｔ' ｓ　Ａｌｌ　ｆｉｃｔｉｏｎ.　私の絶命を無かった事にした」
ネイティブな発音で純菜は言う

「……やっぱりな」

「いきなり血流操作は酷くない？私何か悪いことした？」

「寝てる人間に対して対人殺傷用の破片手榴弾投げつける事の何処が悪くないと？」

「いやいや、反射が効いてるからやったんであって、『僕は悪くない』」

少しの沈黙の後、レイキは、はぁー、とため息をつく

「まぁ、グダグダやっててもしかたない」

純菜はテンションをいつもの調子に戻して

「じゃあミハイルに飯たかりに行こう☆」

――――――――

――――――

――――

「「ご馳走様、と」」

レイキと純菜がハモる

ミーシャが言う

「お前ら、食後にも祈るんだな」

純菜は、何を言っているんだ？、という顔で首を傾げる

するとレイキが、口を開く

「まぁ、それが私たちの故郷の文化ですしね」

すると純菜は言う

「そういえば聞いたことがある、
キリスト教では、長ったらしい食前の祈りがあって、食後の祈りは無いとかなんとか」

レイキは答える
「そうだね、キリスト教の人に怒られるから『長ったらしい』とか言うのはやめようね」

純菜は、クスッ、と笑いながら
「そうだね」

―――――
―――――
―――――

「それじゃあ、お世話になりました」

ミーシャは言う
「金とかは大丈夫なのか？」

「はい、盗賊返り討ちにして、パンツ一丁にして、警察署内にポイすれば……」

「おいやめろ」

「断る、人間は技術を手にすると使いたくなるんです。行こう純菜」

純菜はポカンとしている
レイキは、頭に疑問符を浮かべ
「……？どうした？」

「レイキ君が、名前を呼んだ……」

「？　ああ、嫌だった？」

「いいよ、名前で呼んで」

レイキは、ん、と軽く一言返事して
それからミーシャの方を見て

「お世話になりました、またおめもじ叶う日を楽しみにしています」

「おぅ」

大嘘憑き（後書き）

次回予告

――殺すのは抵抗があるな、これでも俺一般人だし
一方さんの能力を手にした少年「西田麗機」

――君の反射を無かった事にした
ハイテンション少女「塩崎純菜」

次回『金稼ぎ』
神に後悔は存在しない

金稼ぎ（前書き）

――ッエーイ☆演出ゴクロー。華々しく散らせてやるから感謝しろォ

一方さんの能力を手にした少年『西田麗機』

――！？

大嘘憑きを手にしたキチガイ少女『塩崎純菜』

金稼ぎ

――路地裏――

適当に路地裏を進む少女二人、二人は、年が2つ程離れている様にも見える。
見方を変えれば姉妹にも見える様な、そんな二人だ

で、此処は路地裏、見た目中学生と小学生が居ていいところではない
この国は日本より治安が悪い、世界水準で見てみれば治安はいい方ではあるが
それでも夜の路地裏は危険だ、夕方だけど

「ようようお嬢ちゃん達ぃ」
「ちょっと付き合えよ」

「……」

チンピラ的な人たちが御登場(ログイン)しました

「えっ、あの、その」
「いいじゃねえかちょっとくらい付き合えよ」

チンピラAが少女の一人に触れた瞬間
チンピラAは気絶した

「!?なんだ!?」
チンピラBが叫ぶ

「イヒッ……あははぎゃはあはははひひひぎゃははあはアハあはははッ！！」
小さい方の少女、というかレイキは狂ったように笑う
そして風が集まり、高電離気体（プラズマ）が出来る

「！？」
もう一人の少女、というか純菜はレイキの様子に対して驚いてる
彼は結構温厚で、一方さんの笑い方しながら人を殺す様な人間では無いはずだ

「くそぉぉおお！」
チンピラBがヤケクソ気味に顔面パンチ、しかし反射される

「あはははハはははひゃひゃハハはァァ！攻撃は無駄ァ！防御も貫通ゥ！」

殺せ、と絶叫する。するとプラズマはチンピラBを狙い撃つ

「がぁぁぁぁぁ！！」

「ッエーイ☆演出ゴクロー。華々しく散らせてやるから感謝しろォ！！」

狂気の笑いがこだまする
そこで純菜は、思いっきりレイキに殴りかかる

「どりゃぁ！」

「ひでぶ！」

（――反射が、効いてない……？）

「つか、俺は、なんであんなにテンションが上がってたんだ……？」

チンピラ二人はもう気絶している

「君の反射を無かったことにした。本当、君どうかしてたよ」

「あ、ああ、本当にな……」

レイキは凹んだ、それと同時に考えた

（……どうせあの神（笑）の事だし、変なオプション付けたんだろう、

純菜も過負荷（マイナス）オーラ出してたし）

適当に結論を付けた所で、純菜が

「とりあえず、大嘘憑き（オールフィクション）キャンセルを使いましょうか

右手で触れるだけ」

幻想殺し（イマジンブレイカー）が発動した時のキュイーンって音がして

反射の演算が出来るようになった

「……殺すのは抵抗があるな、これでも俺一般人だし」

「まぁ、さっきは謎の暴走だしね」

「身ぐるみ剥いで捨てようか」

早い手つきで、服を脱がし、ポケットの中を探る

数枚の紙幣が入った財布を2つと、血で汚れたナイフ、単発式の拳銃を手に入れた
わざわざ服を着せるなんてせず、その場に放置した

レイキは言う
「そろそろ夜だね、宿屋にでも行く？」

すかさず純菜がツッコミを入れる
「ＲＰＧか！」

「ツッコむのそこ！？」

金稼ぎ（後書き）

――この世界の貨幣価値ってどういう感じなんだろう
一方さんの能力を手に入れた少年『西田麗機』

――フリントロック式単発拳銃、命中率は０．００１％
大嘘憑きと武器を出す能力を持つ少女『塩崎純菜』

次回「王政」
※タイトルと内容は予告なくズレる事があります

王政（前書き）

――アハｓｙｈｍｋａｌｆｕｎ！！

一方さんの能力を手にした少年『西田麗機』

――ただし弾丸は未元物質（ダークマター）♪

武器を召喚する能力と大嘘憑きを手にした少女『塩崎純菜』

王政

「ふんっ！」

「うごぉ！」

純菜がレイキに思いっきりチョップを入れる

「なんだ！？何故（なにゆえ）チョップを入れる！？つーか何故チョップが入る！？」

「お前の反射は絶対の壁じゃねえだろうが、ただ向かってくるベクトルを反対にしてるだけだ」

純菜は流れる様に説明する

「なら話しは簡単でよぉ、直撃の寸前で拳を引き戻せばいい」

「木原神拳！？」

レイキは信じられないような物を見る目で見る

「正解☆私は君の思考回路、感情パターン、私生活、［ピーー］の回数、性癖、ブログや日記の内容、

次いでに遺伝子の塩基配列や自分だけの現実（パーソナルリアリティ）全てを把握してるよ？」

「何お前！？何なのお前！？俺のストーカーか何か！？」

「……」

純菜は目を逸らす

「おいテメェ」

「え、えっと……『ベレッタＭ９』」

すると純菜の手の中に９ｍｍ弾使用の軍用拳銃が出てくる

「あァ？拳銃如き、反射出来ないとでも――うごぉ！？」

銃声が鳴り響き、レイキに脇腹に穴が開く

「ただし弾丸は未元物質（ダークマター）♪　光子とほぼ同じ性質でありながら、
　それが原子として成立する物質だよ」

「これが未元物質。異物の混じった空間、ここはお前の知る世界じゃねえんだよ」

ドヤ顔で台詞を吐く純菜

「確かに、この世界にゃオマエの操る？『未元物質』なんてものは存在しねえ

　そいつに教科書の法則は通じねェし、
　素粒子（ダークマター）に触れた光波や電波が普通ならありえねェベクトル方向に曲がっちまう事もあンだろォよ。

だからまァ、この世界の理に従ってベクトル演算式を組み立ててたンじゃ

『隙間』ができちまうのも無理ねェが」

「……」

純菜は無言でマガジンを外し、掌に召喚した別の未元物質の弾丸が入ったマガジンに交換する

「だったらそいつも含めて演算し直せばイイ。この世界は『未元物

質』を含む素粒子で構成されていると再定義して、新世界（オマエ）の公式を暴けばチェックメイトだ」

「乗ったほうがいい？」

「うン」

「――自分に酔ってんじゃねえぞ一方通行ぉおおお！！」

「違う！場面違う！あと「いっぽうつうこう」じゃなくて「アクセラレータ」だから！」

「そのツッコミを待っていた！　……そろそろこの茶番劇終わらせようか」

純菜は拳銃をポケットに仕舞って、レイキの傷を無かった事にして、昨日チンピラから強奪した単発銃を仕舞おうと触れた瞬間

「フリントロック式単発拳銃、命中率は０．００１％」

「低っ」

「武器に触れると、武器の情報が頭に流れ込むらしいね」

「お、おぅ、そうか」

――――――――――

――外――

「おい貴様」
「あ？」
なんか貴族みたいな人が話しかけてきたので、レイキはとりあえず威嚇しておく
「貴様……この吾に向かってその態度……ッ！万死に値する！」
（え……？言葉遣いだけで？なにこの人、皇族か何かなの？）
レイキが呆然としていると、純菜が口を開き
「大変失礼しました。失礼ですが、私供（わたくしども）は異国の旅人でして、貴方様がどなたか存じ上げません。宜しければ、貴方様がどなたか、ご教示願えませんか？」
「ふんっ、私はベリリウル男爵家のベリリウル＝ウリヤノフ＝シュイコフだ」
通行人Ａはドヤ顔で名乗った
すると純菜が
「は？男爵程度でここまで偉そうにしてんの？」
リレーするようにレイキが
「つうか、御用件を承ってやるから、済んだらさっさと消えてくんない？通行人Ａ」
「き、さまらッッ！！護衛兵！こいつらを始末しろ！」
後ろから剣持ったオッサン二人が襲いかかる
レイキは地面を軽く踏みつけ、地面にかかった圧力を操作

大きさを変換し、反作用も下に向ける
すると、そこを中心に地面にヒビが入る
残骸編の一方ｖｓあわきんを思い出して欲しい、あんな感じ

「ぐわっ！」
「な、なんだ！？」

「土系統の魔法か！？　早く魔力封じの結界を張れ！」

「光よりも早くないと無理だと思うよ？」
レイキが言うと同時に護衛兵Ａに接近、皮膚に触れ、適当に血流を操作する
護衛兵Ａは全身から血を吹き出し、倒れた

「アハヒャ！そういえば、黒翼使ってないから試してみましょ、そォしましょ」
レイキはテンションがあの時の様になってる

「鬼畜か」
純菜はツッコミを入れておく、適当に

「アハｓｙｈｍｋａｌｆｕｎ！！」

「ひ、ヒィ！」
「あ、悪魔！！」

「ｂｇｈｏｅｉｈｉｕｆｄｊｈｄｒｕｉｓ」

適当にＡＩＭを発射したり、黒翼で攻撃したり

「……」
純菜は武器を出す程度の能力で、超電磁砲（レールガン）に使うあのコインを武器として召喚
「おォｈｓｋォォ！！ｎｈｕｅａ！！」
「もう一度頑張ってみよ。」
「ｋｏ何ｈｕｄ？ｓｋａ何ｊｉｈ始ｋｈｈ？？」
「こんなところでくよくよしてないで、」
「ｋｏｈａ超電磁ｊｉｈｈ砲ｈｄｈｓｘｗ？？」
「自分で自分に嘘つかないで、」
「又ｊｇｇｇｇ一度」
「もう一度っ！！」
そして純菜はコイントスをして
コインは地面に転がる
「失敗するんかい！！」
いつの間にか黒翼は消え失せていた
「そもそも超電磁砲なんか撃てませんし」
「だろうねぇ！」

王政（後書き）

――まぁ、素人が日本刀使えばそうなるわなぁ
一方さんの能力を手にした少年『西田麗機』

――うるさい！うるさい！うるさい！（裏声）
武器を召喚する能力の持ち主『塩崎純菜』

次回「絶対王政」
禁書厨な俺と釘宮ウイルスが交差する時、物語は始まる―

絶対王政（前書き）

※タイトルと内容は予告なくズレます

「何！？恥ずかしかったの！？感情に身を任せた結果なの！？」

――西田麗機

「『贄殿遮那』！『炎の翼』！そして反射をなかったことに！！」

――塩崎純菜

絶対王政

「とりあえず、このベリリウル＝ウリヤノフ＝シュイコフ男爵はどうする？」
レイキは尋ねる

「放置。よく名前覚えられるね」
純菜は二文字で返す

「まぁ、これでも、学園都市最強と同じ頭の良さしてるし」

「ああ、そういやそうだったね」
純菜は納得した様に言った
そして純菜は続けて
「西田ー、ケーキ食いに行こうぜ」

「唐突だなオイ」

―――――――――
―――――――――
―――――――――

「もしゃもしゃ……」

「……なんでケーキが先に来て、コーヒーが遅いんだよ……」
レイキは、足で床を蹴り付ける

「まぁ、落ち着いて。食べる？」
純菜は諭す様に、ケーキを差し出す

「要らん」

「そう」

純菜はそういうと、黙々とケーキを食べ、紅茶に口を付ける

すると突然

「動くな！強盗だ！」

剣を構えた四人の強盗がご来店

「あァ？」

「無視しろ。ケーキ美味しい」

「大人しくしろ！」

「チッ……店員さンが動けねェンじゃコーヒーが来ねェじゃねェか」

レイキは苛立ちを床にぶつける様に蹴り付ける

「おい！動くな！」

「大人しくしてんだから、紅茶飲む位いいだろ？」

「ふざけんな！」

強盗は、剣でテーブルを叩く

その衝撃でケーキが落下し、ケ／ー／キになり、紅茶は殆どこぼれ落ちる――

「……イヒャ！」

純菜がちょっとヤバイ声を出す

「……おーい、目がイっちゃってんだけ――
レイキの言葉を押さえつけ、純菜はレイキにキスをする
反射？そんな物なかった

「――テメ、何――
レイキが何すんだよ、と言う前に
純菜は床を踏みつけ
床に掛かったベクトルを操作する
「私の三つ目の能力は、口移し（リップサービス）。
ベクトル操作と演算能力を大嘘憑きと武器製造能力と交換した」

「まじでか」

「という訳で、死ねよクズ共ォ！ギャハヒャハァ！」

「ギャアア！」
「助けてえ！」

「よっしゃ！自転パンチしてやる！ヒャハッ！」

その日、この星の自転は、五分間遅れる事となる

「その遅れは無かった事にしておく、大嘘憑きマジ便利」

店は大破し、半径５ｋ？が焦土と化した

「ふぅ……。そろそろ、返すよ」

純菜はレイキにキスをする。レイキが顔真っ赤にしてたのは言うまでもない

「……」

「……」

沈黙の後、純菜も顔を紅潮させる

「オイ」

「……」

「お前も顔真っ赤にすんならやんなや」

「うるさい！うるさい！うるさい！（裏声）」

「釘宮ボイス！？」

レイキがそう言った直後、純菜が日本刀を取り出す

「『贄殿遮那』！『炎の翼』！そして反射をなかったことに！！」

「うわっ！ちょっ！」

「貴方を殺して私も死ぬ！」

「何！？恥ずかしかったの！？感情に身を任せた結果なの！？」

純菜が贄殿遮那（レプリカ）を振り下ろすと地面に刺さる

「抜けない……」

「まぁ素人が日本刀使えばそうなるわな……」

「……」

「落ち着いた？」

「うん」

絶対王政（後書き）

※タイトルと内容は予告なくズレる場合があります

「それぞれの幸福は、徐々にズレ、曲がり、歪んでいく。
神は、残酷だ。才能は常に希望と一致しない」

「お、お前は――」
――西田麗機

「――――――」
――塩崎純菜

「次回【再会】」
「良心の呵責に苦しむのは、人間だけ。
神に罪悪感なんて、存在しない」

キャラまとめ（前書き）

一章のキャラまとめです

キャラまとめ

西田麗機　ニシダ　レイキ
今作の主人公
性格：基本温厚。よくリアクションが取れ、ボケも出来るしツッコミも出来る。
　基本ボケ。純菜が居るとツッコミに回る
能力：「一方通行（アクセラレータ）」
一方通行：原作「とある魔術の禁書目録」
自身が観測した現象から逆算して、本物に近い推論を導き出す能力。
ベクトル操作や黒翼は単なる付加価値に過ぎない

塩崎純菜　シオサキ　ジュンナ
今作のメインヒロイン、レイキの幼馴染
性格：レイキの前では明るく前向きな性格。
　他の人間の前ではクール（というか冷淡）に振舞う
　こう見えて冷静
能力：「大嘘憑き」「武器を虚空から出す能力」「口移し」「大嘘憑きキャンセラー」「不明」
大嘘憑き（オールフィクション）：原作「めだかボックス」
全てをなかった事にする能力、原作では球磨川禊が「手のひら孵し（ハンドレット・ガントレット）」を改造した奴。例外はあるが、ほとんどの物をなかったことに出来る
武器を虚空から出す能力（名称未設定）：（オリジナル）
武器を無から出現させる能力、自分が武器と見なせば、どんな物でも出せる、先割れスプーンから、I．C．B．M．まで。未元物質（ダークマター）製の弾丸を作れた事から、フィクションの武器も出せる模様

口移し（リップサービス）：原作「めだかボックス」
スキルを傍受出来るスキル。ちなみに、演算能力は「異常（アブノーマル）」と見なした為、受け取る事が出来た

大嘘憑きキャンセラー（名称未設定）：（一応オリジナル）
大嘘憑きでなかった事にした事を、復活させる事が出来る。
発動方法は右手で触れるだけ、という幻想殺（イマジンブレイカー）しの様な感じ
発動タイミングは、任意で、発動させる気が無ければ、右手で触れても発動しない

不明：後どれだけスキルがあるのか、どんなスキルなのか不明。
　１京個あるとも言われる

ミハイル＝デ＝ダス＝リチウミル
ミドルネームは適当に決めた。謎の好青年、出番はその内
性格：温厚で、お人好し。他人の事でも喜んだり、悲しんだり出来る
能力：「魔法」
魔法：剣と魔法の世界なので
　ちなみに属性は風、水、回復。どうでもいいね

???
自称神様　自称糞ジジイ　自称クソ野郎
神でもあるし、天使でもあるし、人間でもあるし、精霊でもある
どう捉えるかは自分次第
性格：温厚でも過激でも冷静でも熱血でも感情的でも冷淡でもある
能力：「????」
????：どんな事も出来るし、何も出来ない

キャラまとめ（後書き）

名称未設定の能力の名前を募集します

再会（前書き）

「舐めてンじゃ、ねェぞ……この、三下がァァァァアアア！！」

――「西田麗機」

「久しぶり！元気だった？……『それじゃ、殺すけど。いいよね？』」

――「塩崎純菜」

再会

「色々となかったことにした」
自転パンチに依る被害、強盗が来てから今迄の客、店員、強盗の記憶
強盗の強盗したい気持ち、をなかったことにした

「大嘘憑きマジ便利」

「大嘘憑きは本当は欠点じゃないのかな？　欠点と書いてマイナス
と読むような奴じゃないかな？」

「大嘘憑きキャンセルの能力が有るから、只の便利な能力だよな、
それ」
レイキはそういうと、あれ？と首をかしげ質問する
「俺、てっきり3つ目の能力は大嘘憑きキャンセラーだと思ったん
だが……口移しは……あれ？」

そういうと、純菜は
「ああ、本当は、3つ目の願いは、願い事を無限にして。なのさ」

「……え？」

「都合のいい所で切ったのさ☆」
純菜は、レイキを嘲笑うかの様に、ニヤニヤしながら答えた

「うっぜェェェェ！！……つーかコーヒーまだかよ！！
なんでケーキが先に来て、コーヒーがまだなんだよ！？」

「まぁ、落ち着いてよ」

「チッ……」
レイキは、舌打ちを打って、大人しくなる
「コーヒーLをお待ちのお客様、大変お待たせいたしました」
「あ、はい、どうもです」
「……ふぅ……苦っ」
レイキはコーヒーを啜ると、その一言だけ発した
「幼女化したのが原因かな？」
「……神様、この世界が、アンタの作った奇跡の通りに動いてるてんなら」
「まずは！」
「ぶち殺す！」
「ふふ」
純菜は、その様子を見て、微笑する
「……お前が笑った所って、そんなに見た事ない気がする」
「そう？」
純菜とレイキは、盗んだ金で支払いを済ませ、適当に野原を彷徨(うろつ)く
「私たちの目的ってなんだっけ？」

「ただのんびりと暮らすこと、
お前の武器製造能力で純金製の剣を作って売ればいくらか金になんだろ」

「人としてどうなの？」

「経済が混乱するだろうが……まぁこの国はデフレ気味だ、
ちょっとインフレ起こしても問題ない」

「……まぁ、君がそういうならいいけどさ」

「……」

「平和だねー……」

「……チッ」

男が後ろから日本刀で斬り付けてきた
しかし、反射される

「あァ？なンだコイツ？」
レイキは、一方さんの様な言葉遣いになる

「さぁ？ていうか、この世界に日本刀なんて有ったのかね？」

「ひ、ひぃ！」

男は、恐怖の悲鳴を上げる
明らかに素人、というか村人Ａと言われても納得してしまう

その様子を見て、レイキは何かを思いついた様に、口角をつり上げ、言う

「大丈夫、殺しはしねェ」

「ほ、本当か！？」

「お前の皮膚を五割剥いでやる、それでも生きてたら、許してやるっつってンだよ」

「言いたかっただけだろ」

純菜は呆れながら言う

すると、声がする

「なに先走ってんだよお前よぉ、
せっかく買った日本刀まで壊しやがって、高かったんだぞ？それ」

「お、お前は！？――何？お前も神に呼ばれたの？」

レイキと純菜は目の前の人物に覚えがあった

大橋仁江

中学の時の友達、ってだけ

純菜は、その人物を見て、言った

「久しぶり！元気だった？……『それじゃ、殺すけど。いいよね？』」

レイキは、それに合わせる様に

「殺気がバリンバリンに出てたンでェ、ＳＡＴＳＵＧＡＩしちゃう

ぞっ」

レイキは、足で地面を蹴り、そのベクトルを操作する
純菜は、叫ぶ
「『袖白雪』！『千本桜』！」

純菜の手に二本の斬魄刀が顕現する
それと同時にレイキが、左手で血流操作しに掛かる

「ふっ」
仁江は、鼻で笑い、右手で、その左手を払いのける

「――っ！？」

そのまま仁江は、右フックでレイキの顔面を殴りつける
レイキは、脳震盪を起こし、意識が混濁、起き上がれなくなる

「ガハッ！」

「クソッ！死ね！」
純菜は絶叫と同時、右手の袖白雪で切りかかる

仁江は、右手の甲で刀身に触れる
すると、斬魄刀は塵になる

「な――！ファック！『散れ、千本桜景厳』！！」

「卍解！？」
レイキが驚きの余り叫ぶ、しかし純菜はこれを無視して攻撃する

「数で囲むか……だが」
仁江は、純菜に急激に接近し、純菜に右手で触れる
すると、全ての刃が地面に落ちる
「クッ！『未元物質の翼』！」
「無駄だ！」
「クッ！武器製造能力で作った武器は打ち消されてしまうのか！？」
「俺は幻想殺しを願ったんでな！」
「『グロック17』！」
純菜の手に拳銃が出現する
「遊びは、これまでにしよう」
仁江は、純菜の手を掴む、すると純菜は拳銃を落とす
純菜は、拳銃をレイキの方へ蹴飛ばす
仁江は、その行動をスルーし、後ろ手に手錠を掛ける
レイキは必死に演算し、同時に絶叫する
「――舐めてンじゃ、ねェぞ……この、三下がァァァァアアア！！」
巨大な竜巻が、仁江の方へと向かう、しかし仁江は打ち消す
「それじゃあ、あばよ！」
瞬間移動の様な物で、純菜と仁江は飛んでいった

再会（後書き）

「第二章、突入」

「何を、どうすればいい……」

――「西田麗機」

（手足が完全に拘束されちゃ、どうしようもない……信じようか）

――「塩崎純菜」

「第一試練ってか？オラわくわくすっぞ」

――「」――

奪還　序章（前書き）

（……何かが引っかかる……。そこに逆転のヒントが）

――「西田麗機」

「捕まった……」

――「塩崎純菜」

奪還　序章

（……何をどうすればいい？）
レイキは、誰も居ない草原で思考を巡らす

（なんであの野郎は純菜を誘拐した？）

（……いや、それは後で問い詰めればいい……。それより……）

レイキは、純菜が召喚した拳銃――グロック17とか言ってた――を拾う
これからの事を考える

（……何かが引っかかる……。そこに逆転のヒントがある。……といいな）

――――――――――――――――

一方その頃、謎の塔

「捕まった……」
純菜は両手両足を拘束された上、幻想殺しの右手に触れている

「奴は来るかな？」
大橋は一人呟く

（手足が完全に拘束されちゃ、どうしようもない……信じようか、来いよ本当に）

「あ、脇腹触るのやめて」
「すまん」
――――――――――
「……あー、何も思い浮かばん！　なんであいつ召喚したんだよ神！！」
宿屋で一人、レイキは叫ぶ
すると、突然声が聞こえる
「第一試練ってか？　オラわくわくしてきたぞ！」
「……殺すぞ」
いきなり登場した自称神に、驚嘆もなく、レイキは言う
「復活するよ？　即座に」
「……アイツは何処に居る」
レイキは無視して、神に尋ねる
「何故か塔に居る、魔王城的な雰囲気の」
「どこに塔はある」
「ヒントはここまでだ、聞き込みすれば直ぐに見つかるぜ」
「じゃあ消えろ」
レイキは、能力を使い、風をぶつける
神は、風に溶ける様に消えた

「……」

ふぅー、と息を吹く

まだ奪還のチャンスはあるはずだ

奪還　序章（後書き）

「大橋くゥゥゥゥン！！　スクラップの時間だぜェ！」
――「西田麗機」

「好きです」
――「塩崎純菜」

「……」
――「大橋仁江」

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1883z/

剣と魔法のファンタジーも十数種類の素粒子と四つの力と十一次元で構成され

2012年1月10日22時50分発行